

さき げき
先 駆

中京大学体育学部 教授 深井 一三

昭和58年4月26日(火)午後1時30分、忽然と逝去されました。故・三宅芳夫教授の霊前に、謹んで心からの哀悼の意を捧げます。

先輩は、日本体操競技界の偉大なる先達でありました。日本の体操競技が、始めて国際競技に参加したのは、1932年(昭和7年)、第10回オリンピックロスアンゼルス大会であります。当時の体操技術のレベルからすると、まことに勇気のいる初出場であったわけで、日本選手の苦闘も大変なものであったと想像できるが、ともかく、記念すべき体操日本の夜明けでありました。

体操競技の会場は、メインである陸上競技場の中の緑の美しい芝生の上で、燦々と輝くカリフォルニアの太陽をうけ、しかも競技場を埋める大観衆の声援が、大変な精神的負荷になったので、力が十分に発揮できなかつたようでありました。初参加の緊張のうえに、青天井の大会場での競技だけに、その環境から受けるプレッシャーを考えると、無理もないことではありましたが、本質的な問題として、日本が考えていた体操技術の理解度が、体操先進国と比較して、10年以上おかれていたということでありました。

今日のような情報化社会ならよいのですが、外国からの活字による文献だけがたよりで、辞書を片手に体操技術の開拓をした試行錯誤の多い時代で、しかも連続写真が得難いだけに、単発の写真をながめ、運動の要領や技のさばき方を研究しなければならないだけに、技術の解釈が異なつたのは当然なことでありましょう。あん馬運動の両脚旋回という運動が、両腕立て正面支持の開脚姿勢から、体を左右に振動させる基本的な動作を土台として、両脚旋回に発展させていたので、その要領は、振子の原理を活用するもので、常に両脚が馬体に接触する状態で、正面、背面支持姿勢を経過する際には、衣擦きぬすれの音を発して両脚旋回を継続することが、この技の習得と理解してオリンピックに参加したところ、体操の先進国では、10年前に実施していた運動方法と、失笑されたとのエピソードが残っている。また当時は、外国から技術書を取りよせ、翻訳して日本語による体操用語を作成する必要がありました。つり輪運動の技術解説のなかに“肩をdislocatingさせて、体を前に振る”という文がでてきた、この単語を辞書でみると、“脱臼”という訳語がでてくるわけで、直訳すると“肩を脱臼させて、体を前に振る”という言葉になってくる。この運動の説明に困却した結果、運動の方法を要約した言葉で“肩転位”という体操用語を考案しているのです。

このような研究実践の苦労を背景に、オリンピックに参加して、外国選手の技(わざ)を見聞し、競技ルールを理解をしてからは、その成長は、まことに急速で、つづく1936年(昭和11年)の第11回ベルリンオリンピック大会では、団体第9位にと躍進しました。この選手団の一員として、三宅芳夫選手が大活躍をしたのであります。徳島県出身の美青年で“モナリザの微笑”をおもわす、つり輪での十字懸垂は、今でも、一幅の名画であったと、語り草となっております。こ

のベルリン大会までが、体操日本の揺籃期とみられる時期で、技の開拓や習得には、まだまだ試行錯誤の多かった、手探りの時代でありました。

ベルリン大会に参加するための準備期に、外国からの体操技術書を翻訳したところ、平行棒運動のなかに“棒下宙返り”という技ができてきた、早速、この技の練習をはじめ、練習を重ねて上達してくると、運動の経過中に、体が棒上にはみだす雄大な宙返りに発展するのでありますが技の解釈には、几帳面なまでに忠実であったようで、棒上に体がはみだしては、棒下宙返りの概念に合わないとして、もっぱら棒下で回転する宙返りの練習に終始して、ベルリンに参加してみると、外国の優秀な選手は、すべて棒上に体がはみだす雄大な宙返りを展開していたので、ガッカリしたというエピソードが残っております。

日本の体操競技が、世界に誇るスポーツのひとつに発展した現在からすると、その礎石ともみられる時代であっただけに、先輩たちの苦闘の足跡には、貴重な教訓が含まれ、この平行棒での失敗談は、揺籃期の笑えないエピソードであり、日本人の教えられたことへの“きまじめさ”が、かたくななまでにみられる事例でありましょう。

“先人のあとを追うな、先人の求めたものを求めよ”この芭蕉の言葉は、人生の哲学でありましょう。競技スポーツに関係するものにとっても、ひとつの教訓であります。

ベルリンオリンピックの体操競技で、個人総合優勝を飾ったのは、ドイツのシュワルツマン選手であり、彼が、鉄棒運動の競技で始めて発表した“伸身開脚とび越しおり”の離れ技は、当時の世界の体操界ではウルトラC級の技で、独創性・決断性に富む最高級難度に格付けされ、その成功によってチャンピオンに輝いたのであります。

三宅選手たちが持ち帰った、私たちへの土産が、この演技の一枚の写真でありました。鉄棒の上方に、大の字の姿勢でくっきりと浮き上がった、空間飛躍の安定したポーズは、当時の若いジムナストたちを陶醉させたもので、この新しい技への挑戦をはじめたのであります。空間飛躍の雄大な姿勢は理解できても、それに持ち込む逆手車輪のさばき方が、まさに暗中模索の状態、ベルリン帰りの先輩たちに質問をしても、要領のえない解説で危険防止のために盛り上げた砂場に、何度も墜落するといった練習が続き、ついに成功する者もなく、この練習は、戦争のために中断してしまいました。

戦後、日本が初めてオリンピックに復帰がゆるされたのは、1952年（昭和27年）第15回ヘルシンキ大会からであります。この大会に、前述のシュワレツマン選手が参加して、鉄棒の競技で銀メダルを獲得したのであります。日本の選手にとっては、彼の選手生活の長いこと、体操競技への愛着に驚嘆したのであります。それ以上に、幻の技であった“伸身開脚とび越し”との対面が嬉しいことでありました。日本の体操界にとっても、ベルリン以来16年間のブランクがありました。戦争という暗黒時代につづいて、国際社会への復帰がゆるされなかった時期を経過して、この大会に参加することができたのであります。この間、情熱的なジムナストたちの努力によって、立派に先達たちの技術を育て、堅実な進歩のなかで、技術を見る力を育成しておりました。

“この技を習得したくて10年以上も努力したが果せなかった。ベルリン当時の先輩たちは、見

る目も余裕もなかったのかもしれない。ヘルシンキで、始めてシュワルツマンの伸身開脚とび越しの実物を見たとき、鬼の首をとったように嬉しかった”との言葉が、ヘルシンキに参加した日本選手たちの述懐であって、帰国するまでには全員が、この技をマスターしてきたのであります。

“百聞は一見にしかず”という言葉がありますが、この技への永年のチャレンジが、“見る目”“見る力”を育てていたのでありましょう。極めて短期日に、この技が習得できたのは、決して偶然ではなかったのであります。

現代の競技スポーツには、クリエイティブできる選手の育成が重要でありましょう。創造的な活動には、自主的で忍耐強い努力が必要で、スポーツ活動には、“数をかけろ”“やってやってやりまくれ”といった言葉が多くて、非科学的とみられやすいが、これは、考えて数をかける意味であって、その過程には、諸科学の導入や諸情報の獲得が重要なのであって、忍耐的な努力や意欲的な関心の伴わないところに、創造的な活動は育たないことになりましょう。今日の情報化社会においても“見る目”“見る力”を育てることが一層肝要な課題となりますが、中国の古書“大学”の“心ここにあらざれば、視れども見えず、聴けども聞えず、食えどもその味を知らず”の諺をモットーに、日本の体操競技の揺籃期を、勇気をもって堂々と歩んでくれた、先達のジムナストたちは、私たちに多くの教訓を残してくれました。その偉大なる足跡を回顧して、心から敬意を捧げ、追悼の辞といたします。